

## 巻頭によせて

兵庫県知事

貝原俊氏



平成7年1月17日午前5時46分、兵庫県南部地域を突然襲ったマグニチュード7.2の激震……。私たちは、阪神・淡路大震災で一瞬にして多くの大切なものを失いました。

この未曾有の大災害は、共に生活をしていた動物たちにも大きな影響を与え、混乱のなか、飼い主とはぐれ路頭に迷う犬や猫の姿を街のあちこちで見かけたのです。また、ベットを連れて避難した方々は、肩身の狭い生活を強いられていました。

こうしたなかにあって、わずか震災発生4日後の1月21日に、(社)兵庫県獣医師会、(社)神戸市獣医師会、(社)日本動物福祉協会阪神支部の皆様が、自らの被災をかえりみず、ベットや飼い主を救援すべく「兵庫県南部地震動物救援本部」を設置されたことは、まことに心強く嬉しいものでした。この本部を中心に、全国からのボランティアが参加して、避難所への餌の配給、負傷した動物の収容・保管・治療、飼育困難な動物の一時預かり、放浪動物の保護、所有者や里親探しなど、ありとあらゆる救援対策が精力的かつ献身的に展開されたところです。このことにより、どれだけ多くの被災者が励まされ、動物たちが救われたことでしょう。ここに改めて、深く敬意と感謝の意を表します。

今回の動物救援活動の大きな広がりなどを通じ、動物たちは単なるベットとしての存在だけではなく、家族の一員であり、時には心の支えとなっていたことを再認識するとともに、人や動物はもとより、生きとし生けるものすべてが、相互に支え合い豊かに共存する地域社会の構築の重要性を改めて痛感したところです。

こうした視点に立って、いま兵庫県では、動物愛護思想の普及啓発や動物保護事業の推進を図り、その拠点施設となる「動物愛護センター(仮称)」の建設に努めています。今後とも、共に生きる心を基本に、21世紀の成熟社会にふさわしい創造的復興を進め、人と自然、人と人、人と社会が調和し共生する“こころ豊かな兵庫”の実現に全力をあげてまいりますので、皆様のより一層のご支援とご協力をお願い申し上げます。

最後に、本報告書が、大震災が発生した場合の動物救援体制の指標として、国内外で活用されることを祈念してやみません。

動物救護活動への  
感謝をこめて  
神戸市長  
菅山幸俊



兵庫県南部地震の発生直後からつづけてられました「動物救援活動」がこのたび初期の目的を達成され、無事終了されたとお聞きし、動物救援本部の方々、並びに関係者の皆様方の1年4カ月に及ぶ心温まる取り組みに対しまして、心から敬意を表するものです。思い起こせば、震災当初の混乱した時期、神戸市には被災した市民から多岐にわたる切実な要望が寄せられておりました。その中で、「可愛がっていた動物を探したい。放浪している動物が怖いので何とかしてほしい。けがをしている動物がいるので助けてほしい」などの動物救護に関するものも数多くございました。その当時、神戸市としてもその大切さは認識いたしておりましたが、被災市民に対する救護活動を最優先課題として取り組む必要性から、被災動物対策を実施するまでの十分な人的余裕はなかったのが実状でありました。

このような時、動物愛護と市民への危害発生防止を図る観点から、神戸市獣医師会、兵庫県獣医師会及び日本動物福祉協会阪神支部の皆様が中心となって、「兵庫県南部地震動物救援本部」を早々に設立していただきました。設立に際し、神戸市としては動物管理センター敷地を提供するなど動物救援本部の活動を側面から支援させていただきました。

その後、「全国各地から貴重な浄財が寄せられ、ボランティアの輪も大きな広がりを見せるなど、市民、事業者、ボランティア、行政との連携が図られた先駆的なボランティア活動が動物救援本部を核として被災地で広範囲に展開されました。

人と動物との共生できる社会への要求が高まる中、また過去に例のない大震災で既存の概念や制度の枠を越えた対応が求められる今日、この1年4カ月の間に皆様方が体験された貴重な活動を記録に止めることは誠に意義深く、本報告書が多くの皆様にご活用されますことを念願してやみません。

私たちは、震災の経験から謙虚に学び、その教訓を様々な分野で将来のためにいかしていかなばなりません。皆様方におかれましても、このたびの経験をこれからの動物愛護活動に反映され、充実した取り組みを展開されますことを祈念いたしまして、私の巻頭のごあいさつといたします。

## ご挨拶

社団法人 日本獣医師会

会長 **杉山文男**



阪神・淡路大震災から約2年を経過しようとしております。

その激甚災害の発生当時を思い起こしますと、テレビ報道の時間経過とともに、死者の数、被害の状況が拡大していくのを見るにつけ、事の重大性、深刻さに背筋が寒くなるのを覚えたものでした。

その後、思いのほか急速に復旧作業が進められてきているようですが、6,279人にもものぼる多くの尊い命が失われ、34,900人の方が負傷し、また、未だに入院されている方や、仮設住宅住まいの方が多数おられる状況にあることを思いますと、その傷跡の大きさ、深さに心が痛み、改めて衷心よりお見舞い申し上げるとともに、一日も早い再起、完全復興を祈念する次第です。

この大震災では、(社)兵庫県獣医師会並びに(社)神戸市獣医師会の会員の方も多数罹災されましたが、自ら被害を被ったにもかかわらず、両獣医師会は、(社)日本動物福祉協会阪神支部と連携、協調して被災後間もない平成7年1月下旬には兵庫県南部地震動物救援本部を設置され、被災動物の救護活動を精力的に開始されました。

以来今日まで、この救護活動に対して全国から寄せられた2億6千万円にのぼる義援金と獣医師会員を含む延べ2万人以上のボランティアの方々の善意に支えられながら、救援本部の並々ならぬご尽力、献身的な活動によって総頭数1,556頭の犬猫等の動物を救護し、先般無事に兵庫県南部地震動物救護活動を終了されましたことは誠にご同慶の至りです。

そして、救援本部では、このたび、これまでの活動記録をこのような立派な報告書としてとりまとめられたことに対しまして心から敬意を表します。自然災害が発生しないよう願ってみても、残念ながらそれから逃れることはできず、大自然が何時その絶大なエネルギーを発散させるかは判りませんが、喉元過ぎれば熱さを忘れることのないよう、今後この貴重な報告書が不測の事態における備えとして多くの方に活用されることを願ってやみません。

最後に兵庫県南部地震動物救援本部の関係各位のこれまでのご苦勞に対しまして、重ねて深甚なる敬意と感謝の気持を表します。

## 巻頭のことば

兵庫県南部地震動物救援本部

本部長 鷗尾勝彦



平成7年1月17日、震度7の大地震が兵庫県南部を襲いました。6千余名の尊い人名を奪い、地上のあらゆる財産を破壊し、混乱に陥れ大火を残した。後にはがれきの山が残り、住み慣れた家屋、食糧をも失った。

死者には冥福を、被災者には復興の勇気を励ますこと以外になすすべもなく、皆様にお見舞いを申し上げた次第でありました。その後、広く全国各地から寄せられた動物に対するご支援をくださった方々に、心からお礼申し上げる次第でありました。大災害でありましたが、未経験のため手探りをしながら兵庫県南部地震動物救援本部を(社)兵庫県獣医師会、(社)神戸市獣医師会、(社)日本動物福祉協会阪神支部がボランティア活動を原則として設置した。救援事業は、国、県、市、町の行政指導、協力を得ながら県下2カ所に動物救護センターを設けて、全国からボランティアを募集しながら代表者会議を重ねて1年10ヶ月にわたって被災動物の救援活動を行いました。

この間多くの教訓を学び、反省とともに臨機応変の措置、対策を講じて1,500余頭の動物を収容し、1,000余頭を里親に送り8,000余頭を診療、治療し、動物愛護に関する法律の主旨に則って動物愛護精神の高揚を果たしながら活動を終えることができました。

この震災体験は兵庫県のみの問題ではなく、火山災害、自然災害の多発する日本国土では有事の際、全国の動物防災体制が是非必要であることを痛感いたしました。

災害が発生すれば、交通途絶、通信不能、火災発生、水害発生、水、食糧不足、危険多発、人、動物は身動きがとれなくなります。

国・自治体・民間が一体となった防災対策制度の早期創設がもっとも必要であると思われ、この機会に関係官庁に対しまして今後の具体的な対策の構築を願うものであります。

兵庫県南部地震動物救援本部は、「緊急災害時動物救援本部」に、今後万が一にも国内で大災害が発生したとき、今回残された義援金を活用し、被災した動物を救うべく、制度を創設して頂くことを特に決めました。この動物救護活動期間中、国、県、市、町の関係行政機関、義援金にご協力を頂いた多くの方々、及び、構成団体諸兄に対して厚く御礼を申し上げます。また、本報告書作成に当たっては大阪府立大学獣医生理学教室、太田光明助教授には寝食を忘れるほど多大なご指導を賜り、更に、日新堂印刷株式会社吉田好廣社長の大変なご協力により、この報告書を発刊することができました。ここに両氏に対し深甚なる感謝の意を表わします。今後、人と動物が災害に屈することなく、共存共栄できますことを願い、活動報告のお礼の言葉といたします。皆様のご支援、ご協力誠に有り難うございました。

## まえがき

近代都市を襲ったはじめての大地震に際して、人とともに暮らしていた動物たちは、直に被害を受けたばかりでなく、人の動向に大きく左右され、二重に被害を受けた。この記録はこうした動物たちを救うために、どのように行動したかを記したものである。

この活動は単に被災した動物たちを救ったばかりでなく、動物の救護活動を通じて、人々は自らを救ったことになる。昨年10月22日(日)神戸文化ホールで開催された阪神・淡路大震災シンポジウム「人と動物の大震災 何が起こり、何をすべきか」で神戸市獣医師会長・旗谷昌彦氏は以下のように述べた。「記憶に新しいところで、菅賢岳の火山爆発あるいは奥尻島の地震においても多くの動物たちが被災し、救護活動が展開されました。しかし、今回ほど動物の救護が話題になったこともなかったし、これほど大規模な救護活動が展開されたことは曾てなかったと思います。そのために全てが初めてのことばかりで、動物救護活動のスタート時点では戸惑いの連続であり、失敗や模索を繰り返しながらも、多くの皆様から寄せられた被災動物を何とか助けて欲しいという期待と願いは非常に強いものがございました。その表れが、全国から兵庫県南部地震動物救護本部に寄せられた2億2千万円(当時)にのぼる義援金であり、また関係諸団体、企業の強力なご支援、そして忘れてはならないのが、「動物を助けなければ」と一途な気持ちで北は北海道、南は九州から掛け付けて頂いた、のべ1万7千名にのぼるボランティアの皆さんの献身的な努力と支えであります。一方、私達もこれらの活動を通して実に多くのことを学びました。なかでもこの動物たちの救護はただ単に動物の命を救っただけでなく、実は多くの被災市民を救う活動につながっているのだということです。家族を失い、家を失い、生きる希望さえ失った人、あるいは震災により心に大きな傷を負った人々が、動物がいたから生きられたと語る人、動物を生かすために生きる力を得た人、また不安な毎日を送っている多くの人々が、動物と一緒に暮らすことより、何とか心の安らぎを得ようとした。神戸動物救護センター

で保護収容し、里親に引き取られた動物の実に69%が被災地である神戸市を始め兵庫県下で暮らしている事実、地震前まではそれほど気にもかけてなかった犬や猫を急にかわいがりだしたり、新たに動物を飼育し出した人が増えたという事実、さらには動物病院を訪ねる人と動物が増加したという事実は、大震災の中、動物は掛け替えのない家族の一員として、人と共に逃げ惑い、避難し生きていたということです。この大震災は、コンパニオンアニマル、伴侶動物という言葉が盛んに使われる中で、目に見えない精神的な痛手を無意識のうちに動物を愛しむことにより癒そうとした行動、あるいは、無心な動物と接することにより知らず知らずのうちに心の安定を得ようとした行動が浮き彫りにされました。

この大震災では実に多くの人々が動物により助けられたことを強く心にとどめ、今後はさらに水準の高い動物福祉に向けて我々は一層の努力をしていかなければならないと考えます。

人が、動物とともに、より豊かな生活を続けるために、この大地震における人と動物のふれあいを詳細に記録し、この大地震が新たなスタートになることを願い、本書を刊行する。

被災した動物を救う行動がどのような経緯で始まったか。特に、動管法に関わる兵庫県ならびに市町村の担当者は、人の救護活動が何よりも優先される状況のなかで、苦悩からの出発であった。

この大震災において、動物愛護の精神に基づきさまざまな活動が個人あるいは団体によってなされた。本書では、それらの活動をすべて網羅することは出来ない。巻頭言にも述べられているように、本書は、我が国の動物行政に即った動物愛護活動の一環として、行政の指導を受け、(社)兵庫県獣医師会、(社)神戸獣医師会ならびに(社)日本動物福祉協会阪神支部を中心にしたボランティア活動を記すものである。

なお、本文中、敬称を略している箇所があります。ご了承ください。